

遊びは非認知能力を育む

—非認知能力を育む大切なことは？②—

園長 山崎立哉

非認知能力を育む大切なことのもう1つは、「遊び」です。子どもは本来、そこにあるものを何かに見立てて自分なりに遊びをしようとする能力があります。例えば、大人の使っている靴を持ちだしてお出かけごっこをするなど、空き箱や古新聞などの廃材、洗濯バサミやストローなどの日用品、どんぐりや石、葉っぱなどの自然物から、自分なりに遊び方を工夫します。

そして大切なことは、こうしたおもちゃではないおもちゃはその時の子どもの工夫によって、何にでもなるという点です。買い与えられたおもちゃよりも、自分で見つけたり、大好きな大人も使っている物を工夫したりして、使いこんでいく方が、子どもたちにとって大きな刺激となります。

このような遊びの中で「どうすると面白いか」「なぜそうなっているのか」「何が必要か」「成功したら嬉しい！」「どうしたらもっと上手いく？」等、子どもたちの中で、問いや探求心、知る喜び、問題解決への工夫など様々な能力が育っています。これらは、小学校以降の学校での学習で必要とされているものばかりです。つまり、乳幼児期の遊びは人の知的好奇心の発見であり、この時期に思いっきり遊び込むことが後の人生で大きな意味をもつということなのです。乳幼児期に、親や周囲の大人とかがわりながら、思いっきり遊ぶことが「非認知能力」を大きく伸ばすことにつながります。

以前、本園の入園説明会でのことでした。本園の特徴は「遊び」を大事にしますということを伝えると、ある保護者の方から「ただ遊んでいるだけなのね！？」という言葉が返ってきました。その保護者の方は、遊びの他に何か教えていただけないのかしら！？という思いがあったようです。その時のこちらの説明不足もあったのかも知れませんが、この乳幼児期は、保育者が教えることよりも、子ども自身が自由に主体的に遊び、その遊びに夢中になることによって子ども自身がいろいろな発見をし、工夫をしていくとその遊びがもっと楽しくなります。その中で子どもたちの心の中に、想像力や探求心、共同性や忍耐力などの目には見えない非認知能力が育まれています。

この非認知能力が育つと、その後の認知能力も大きく変わっていきます。この乳幼児期は大人のかかわりと遊びが大事なことを知っていただきたいと思います。